

## 特集：社会福祉専門職と社会学

榎田美雄

神戸市看護大学

\*E-mail:kashida.yoshio@nifty.ne.jp

### Special issue: Social welfare profession and Sociology

KASHIDA Yoshio

Kobe City College of Nursing

#### 1. 本特集の概要

本特集『社会福祉専門職と社会学』は、以下の2本の論文からなっている。

第一論文・政策科学と社会福祉学の方法論から「社会学を基盤とした専門職」構想を  
考える（中根成寿）

第二論文・親支援職における社会学的視点とジェンダー視点の必要性——NPOと大学  
での支援経験から——（巽真理子）

この2本はいずれも、2018年6月17日に中京大学豊田キャンパスで開催された、第16回日本福祉社会学会大会における「テーマセッション②福祉専門職と社会学」で口頭発表されたものである。

この特集まえがきでは、まずは、テーマセッション公募時（2018年3月）の企画主旨を再掲することで、特集の意義の確認をしていきたい。

\*\*\*\*\*

#### 【テーマセッション②「福祉専門職と社会学」企画の趣旨】

本テーマセッション（以下TS）は、2017年秋の第90回日本社会学会大会でのTS1「社会学を基盤にした新しい専門職の可能性」を受けて、構想されている。日社では、まず『理論と方法』31巻2号での江原由美子氏の問題提起（「社会学を基盤にした新しい専門職？」）の内容が確認された（江原由美子，2016，「社会学を基盤にした新しい専門職」『理論と方法』31(2).）。

すなわち、「社会においてまだ解決方法が制度化されていない社会問題領域において、当事者の声を聴き、社会関係調整や情報提供によって解決を図りつつ、その問題の深刻さや解決の重要性を社会に伝え」（江原 2016: 320）る仕事が現実に存在し、すでに社会学出身者が、そういう業務を行っているのに、資格がない、という問題の存在が確認され、未来展望として、「社会問題分析という専門性に即して相談者の問題を明らかにできるようなソーシャル・ワークの仕事の確立が必要」（同）といえるかどうか、問題となった。

日社では、江原立論に対して、大きく4つの疑義が出された。即ち、①社会学という学問そのものに、本当にそのような課題に対応する力があるのか、②社会学の現在の教育課程では、

問題解決に必須の、相談技能などを養成する課程が存在しておらず、能力保証ができないのではないか、③社会学専攻の教育を経なくても、科目としての社会学の学習で足りるのではないのか、④すでにある各専門職の職域を争うことは、社会学にとっては得策とは言えないのではないか、の4点である。

今回のテーマセッションでは、非会員演者として、対人支援の業務を社会学の大学院の入学前・中・後に体験されている巽真理子氏に最初にご登壇頂き、社会学視点がない支援業務がどのような困難に遭遇するのか、そして、社会学視点を獲得することがどのように有効なのかをまず議論したい。その後で、会員報告者（公募）から、上記の4点に関係した「福祉社会学的議論」の提起を頂きたいと考えている。

その際「社会学を基盤とした新しい福祉専門職に未来はあるか」という課題だけでなく、現在の福祉専門職（社会福祉士等）にどのような社会学教育（研修）を施すことが必要なのか、という課題についても、扱っていきたい。

\*\*\*\*\*

結局、合計4名の登壇者で、このテーマセッション②は開催された。

特集掲載者以外では、樫田と、東京大学大学院の中野航綺氏が下記演題で登壇した。

福祉専門職と社会学——このテーマを検討する意義あるいは、専門職の困難と社会学——

樫田美雄（神戸市看護大学）

親支援職における社会学的視点とジェンダー視点の必要性——NPOと大学での支援経験から——巽真理子（大阪府立大学）

政策科学と社会福祉学の方法論から「社会学を基盤とした専門職」構想を考える

中根成寿（京都府立大学）

福祉専門職と社会学——両者の接近を目撃する若手研究者の視点から——

中野航綺（東京大学大学院）

セッションでは、4人がそれぞれ30分ずつ発表し、最後に30分弱の全体討論の時間がとれたので全体討論を行ったが、結局のところ、社会学系の新資格は必要か、という議論の前に、社会学も、ソーシャルワーク（教育）も今の状態でいいのか、という議論をするべきだったと思われた。たとえば、社会学教育論として問いを立てるのなら、①社会学プロパーのための社会学とも、②教養の社会学とも違う、③対人専門職の育成のための社会学、というものを構想することができるのか、できるとすれば、それはどのような社会学なのか、ということが課題になるだろうと思われた。この点については、すでに（樫田、2010）で簡単に論じてあるが、まだまだ不十分だと感じている。議論と研究の継続を期したい。

## 文献

江原由美子、2016、「社会学を基盤にした新しい専門職？」『理論と方法』31(2)：318-321.

樫田美雄、2010、「周辺への／周辺からの社会学」『社会学評論』61(3)：235-256.

\*\*\*\*\*

【編集後記】

『現象と秩序』第9号をお届けします。巻頭の特集「社会福祉専門職と社会学」は、第4号と第8号に掲載してきた2つの特集の発展企画であり、3つの特集は全体として、社会学とは何か、現代社会とは何か、という、経験的知識社会学研究の成果であるともいえるでしょう。中根論文は、相対的に自立の程度を高めている社会福祉学と社会学との関係を再考する助けになる論文です。異論文は親支援職の課題とその課題への社会学の貢献可能性が見える論文になっています。ご堪能ください。菅野論文は、出生前検査を精密に論じており、舞弓・榎田論文は、看護学生とSP（模擬患者）との間のコミュニケーションをビデオ映像をもとに詳細に扱っています。いずれも『現象と秩序』誌らしい、経験的研究ということができるといえるでしょう。最後の高橋・榎田論文は、吃音の特殊さ（どもりに対する対策が、つぎのどもりの特徴を生み出してしまうような連続性がある、という特殊さ）に関する社会学的探求が、単なる、吃音という個別領域にあてはまるメカニズムの探求にとどまらずに、「障害一般」「人間コミュニケーション一般」に関する、総合的な社会学的考察の契機にもなり得るはずだ、という主張をしています。つまり、社会学は、主体の意味創造性をこれまで称揚してきましたが、造り上げようとする意味が、当事者（障害者）に見えているとは限らないということ、意味が造り上げられる過程には、他者の反応が組み込まれるため、期待どおりの意味が造り上げられるとは限らないこと、この2つの点において、楽観的過ぎたのではないのでしょうか。高橋・榎田論文では、吃音者のセルフヘルプ・グループの「コンシャスネス・レイジング活動（吃音者としての誇りをもって生きるための、意識覚醒をめざす集団活動）」には、思い通りの吃音者像を十分に社会化できない、という困難があり、その困難には、一般性がある、という主張をしています（と読めると思います）が、これは従来の社会学の楽観性に対する問題提起であるともいえるでしょう。本当にそういえるのかご批判を頂ければ幸いです。 (Y.K.)

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会（2018年度）

編集委員：榎田美雄(神戸市看護大学)、中塚朋子(就実大学)、堀田裕子(愛知学泉大学)

編集幹事：平田菜津子、尾崎友祐、松田侑子(神戸市外国語大学)

編集協力・印刷協力：村中淑子(桃山学院大学)

『現象と秩序』第9号 2018年 10月31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 榎田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (榎田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>